

マレーシア

景気回復持続も、通貨下落が不安要素

SMBC Asia Monthly

日本総合研究所 調査部

研究員 熊澤 知喜

kumazawa.tomoki@jri.co.jp

■消費・インバウンドが支えとなり回復継続

マレーシア経済は、消費やインバウンド需要が牽引役となって景気回復が続いている。5月の流通業売上高(卸売と小売の合計)は前年同月比+4.7%と前月(同+4.8%)並みの高い伸びを維持した(右上図)。背景には良好な雇用環境があり、5月の失業率は3.5%と新型コロナウイルス流行後で最低水準となった。さらに、海外旅行客の回復も続いている。マレーシア政府系の空港運営会社 MAHB の発表によれば、5月の同社が運営する空港の国際線の利用者数は2019年の7割近くまで回復した。外国人訪問者の回復が小売売上高の増加を後押ししている。

一方、財輸出は低迷が続いている。6月の米ドル建て名目輸出は前年同月比▲18.4%と、4ヵ月連続で前年割れとなった。6月の製造業PMIは47.7と、10ヵ月連続で景況感の分岐点となる50を下回る等、外需の低迷が製造業の生産活動を押し下げている。

先行きも内需とインバウンド需要に牽引された景気回復が継続する見通しである。政府は7月から下位40%の低所得者向けに総額600リンギットの現金給付を開始する等、消費喚起策を実施している。こうした政策対応による下支えもあり、当面の消費は堅調に推移する見込みである。消費の重しとなっていた高インフレもピークアウトしており、5月の消費者物価は前年同月比+2.8%と2022年8月をピークに9ヵ月連続で低下している。中央銀行は7月、2会合ぶりに政策金利の据え置きを決定した。当面、利上げは実施されない可能性が高く、金利上昇による内需への下押し圧力も緩和が見込まれる。加えて外国人観光客の増加によるインバウンド需要によってサービス業の回復が持続すると考えられる。

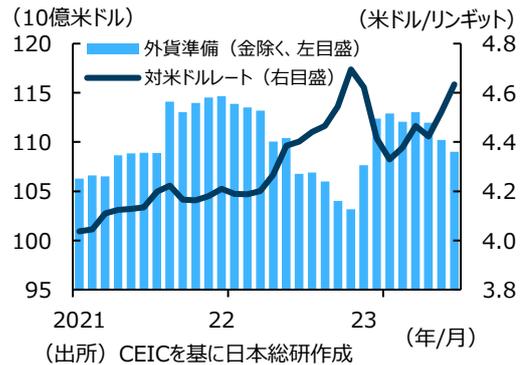
■通貨安進行が懸念材料

景気のリスク要因として、通貨リングgitの急速な減価には注意が必要である。米国金利の引き上げ継続観測や、マレーシアの主要な貿易相手国である中国の景気減速を受け、足元で対米ドルでのリングgit安が進行している(右下図)。6月に中央銀行は過度な為替相場の変動に対して為替介入を行う方針を明らかにしたが、外貨準備には限りがあり、先行き国内の不安定な政治情勢や財政再建の遅れが意識されれば、海外資本の流出によってリングgit安がさらに進む恐れがある。リングgit安の進行は、輸入物価の上昇を通じて国内のインフレ再燃につながる恐れがある。通貨防衛とインフレ対応に追われる形で、中央銀行が再び利上げを実施することになれば、景気が下振れるリスクがある。

＜流通業売上高(季調値)＞



＜為替レート・外貨準備＞



当レポートに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。当レポートは単に情報提供を目的に作成されており、その正確性を当行及び情報提供元が保証するものではなく、また掲載された内容は経済情勢等の変化により変更される事があります。掲載情報は利用者の責任と判断でご利用頂き、また個別の案件につきましては法律・会計・税務等の各方面の専門家にご相談下さるようお願い致します。万一、利用者が当情報報の利用に関して損害を被った場合、当行及び情報提供元はその原因の如何を問わず賠償の責を負いません。